

広島俳句倶楽部

令和六年六月作品集

広島空港へ行く ふい女

家族が広島空港を利用するとき、頼まれもしないのに、送迎を買って出ます。空港周りで遊びたいからです。八天堂で一休み、三景園で散歩、中央森林公園でサイクリング。これが、遊びの三点セットです。最近、飛行機が欠航になったり、遅延したりで、三点セットのはずが二点になったり、単独になったり。その他、三景園の鯉が減ってしまったたり、菖蒲の蕾すらなかったり、サイクリングが草刈りでできなかつたり。それでもまた、行くんですけどね。

順番の番号七十五の端午

子供の日はある第二駐車場

錦鯉群れて流るる橋の下

牡丹に初めの一輪があり

滝落ちて同じ水なくなるを見る

坂道のギア左右に新樹揺れ

下り坂止まらぬタイヤ風光る

夏の橋こちらとあちら結びゆく

スーツケース夏を挟んで進みゆく

開かれたトランク夏の荷が溢れ

《作品鑑賞》

雲雀

ご家族を広島空港まで度々送迎されるのですね。その機会を逃さず楽しく近辺を散策しておられる様子、とても楽しそうに浮き立つような気持ちが伝わります。度々行っておられるようですが、同じところに行っても季節やその時のご自分の心境などにより違った新しい発見や思いがあらることと察します。

順番の番号七十五の端午

子供の日はある第二駐車場

子供さんの無事を祈る気持ちや成長を飲んでおられる事を特に端午の季節から感じます。はるばるの言葉から、少し遠くても子供さんのためなら厭わず！の思いや深い愛情が伝わります。

坂道のギア左右に新樹揺れ

下り坂止まらぬタイヤ風光る

緑に燃える森の中を颯爽と車を走らせている様子が浮かびます。風光るの季節が絶妙です。

開かれたトランク夏の荷が溢れ

帰ってこられた子供さんの荷物、少し汗のついたシャツやお土産の風鈴などがあったのかと、勝手に想像が膨らみます。全体としてご家族への深い愛の中でご自分も緑眩しい季節を存分に跳ね回っておられる元気な様子が読み取れました。

美作の青嶺の囲む古墳かな

夏蝶が通り古墳の帰り道

ここからは出雲街道柿若葉

作州の川に影して夏つばめ

五権の打ちし楔か夏衣

街道の河鹿ずいぶん下に聞き

川滾る風に揺れけり藤の花

卯の花や峠に近く鯉を飼ひ

著莪の花厳しき沙汰の峠越す

根雨に著き畳む日傘や古道終へ

まず赤き夾竹桃の咲き始む

夕風を道端に受け立葵

エンジンの音を響かせ草を刈る

栗の花匂うてゐたり帰り道

梅雨晴や声聞こえるグラウンド

夏畑早晩に入り実を取りぬ

刺繍花剪つて活けたる母の花器

ひた走る夏至の高速道路かな

白南風を受け甲板に立つてをり

なほ洞窟に残る遺骨や沖縄忌

花吹雪瞬きもせず見つめをり

ひと時を散れる桜に過ぎしけり

枝移る親を遡ふなり雀の子

一面の白詰草の野をゆけり

宙に居て鳴きつづけをる雲雀かな

ときをりの風に香れる藤の花

夕方の風納まりて姫空木

著莪の花やうやく朝の日の差しぬ

竹箒置かれしままや花菖蒲

夏草を踏み分けてゆく水辺かな

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

川に沿ひ上れば郷は植田なり

夏燕屋根から屋根へ飛び交ひて

上げ潮の小鱼遶うて河鵜かな

四十雀昼餉の支度してをれば

子らの来て靴いっぱいの梅雨の土間

鉄板の焼きそば汗し食べにけり

打水を飛ばし合ひする兄おとと

夕焼にしばし佇む窓の側

手擲して軽くなりたり洗ひ髪

飛魚のつぎつぎ跳ねる隠岐の海

あざみ

暮の春雲の高きに夕日差す

聞き覚えなき鳥の声夏はじめ

散りさうな鉄線花剪る朝かな

近づけば薔薇二三片落ちにけり

病むインコ我を見てゐる麦の秋

初夏の三日月見つつ帰りたる

群を抜くビルを見てゐる薄暑かな

青鳶の時折戦ぐ夕間暮

六月の友の電話の声大き

川沿ひの青葉の影に立ち止まる

亜矢

夏灯吾子の待ちたる保育園

この垣の今年の四葩待つてをり

白杖の導き楚々と薔薇の園

薔薇の散るみち新婚のやうに行く

窓辺には玻璃の鳥棲む夏館

八重山の匂ひ我が家へパイナップル

ご住職我が家へ見えて新茶汲む

嫁ならば食ふべきものか洗鯉

球場に集ひ掲げるビールかな

廃校の椅子整然とあいの風

綾乃

薔薇の棘雨の雫を落としたる

軽風に犬が尾を上げ夏めける

風薫る野にしばらくは犬と居り

吾もまた犬と駆けたき青野かな

雲低く日暮るる山や梅雨入前

大師寺の白き四葩や門を入り

乱雑に包んで金魚草笑るる

薔薇垣の一輪残る朝となり

小満の坂の石榴の伐られけり

風鈴の鳴り止む寺やいささ雨

殉職の碑ありて花あやめ

近道に膝も笑ふや姫女苑

夕暮は道の真中に鴉の子

父の日や末の娘が母となり

夏の蝶花冠に来て止まる

五月雨に水音高し夜の川

昼顔や昔のままの船溜り

通り雨守宮張り付く植木鉢

夕顔や迷ひ迷ひて鄙の宿

白波の竜骨洗ふ夏の海

麗らかや看る人癒す紀寿の笑顔

庭の木に鶯鳴くを夫と聞き

背戸の山独活を採しに祖母と行く

薰風や白鷺川に沿うて飛び

庭先の故郷からの路を摘む

夏の庭羽音を立てて鴉飛び

時鳥鳴く声もなく夜の雨

兄妹の旅の終りの穴子飯

手を置けばその背のほんに夏瘦して

令歎の花里の道まで枝伸ばし

井藤希

栄吉

大畑恵

青葉して鎮守の杜の静もれり

山の影伸びたる辺り紫蘇畑

潜る時はらはら散りぬ薔薇の門

夏の谷思はぬ方より風の来て

夏蝶の影と曲がりて石畳

港への坂の両側枇杷熟るる

端居して暮れゆく水田見てをりぬ

波音にいつしか慣れて午睡かな

青色を最後に虹の消えにけり

夏至の朝草木匂ふ散歩道

暁子

十葉を雨後の朝日の中に摘む

表札の横を這うたる守宮かな

薔薇の香のアーチをくぐり山荘に

夏の宵デツキに灯すランプかな

潤みたる五月の月と我一人

景の裏に山繭ひとつ見つけたり

木から木へ時に煌めく蜘蛛の糸

山上湖巡りさびたの花に会ふ

夏蝶を目で追うたれば増えにけり

捨てられぬLP盤よ青時雨

すみれ

まづ一つ木橋に係うて水芭蕉

目高群れ時に流れに逆へる

青芒まくり上げては風過ぐる

よく揺るる葉に休みたる夏の蝶

耳澄ましをれば鳥来る夏木立

人波を軽々越へて夏の蝶

青芝に仰向けに寝て雲近し

飛ぶ時に羽透けてをり夏の蝶

紫陽花の鞠一点の傷も無し

梔子の花のある道選びたる

知佳子

燕の巣鴉来ぬやう紐を張る

土間に落ちなかなか消えぬシャボン玉

空青し隣の薔薇の香るなり

幼子にカーネーションを手渡され

畝作る夏鶯の鳴いてをり

次々と玉葱を抜き転がせり

母の居ぬ家に玉葱吊しけり

鼻つまみ空豆を食ふ幼き子

電線に止まる黄鶺鴒つと見る

新じゃがを試しに掘りてまだ小粒

ちどり

残照の中を飛びたるつばくらめ

黒揚羽来てをり外野指定席

景桜や次に会う日を云々す

麦秋や遠くの海がよく光る

夕薄暑カレーがよいと夫の声

梅檀の香るや夜汽車通り過ぎ

緑蔭にヘリコプターの音のして

薄紙に包まれて枇杷届きけり

見上げたる泰山木に花一つ

一両の路面電車や青景風

辻純江

弁当を作つて今日も花を見に

花疲れ窓辺に座り込んでをり

春の昼徘徊忘れてをりにけり

今日も舞ふ蝶の住処は我が家かな

ただ畑を打ち続けをる男かな

病癒へ出雲を訪うて青き踏む

海棠に魅せられ入る蕎麦屋かな

紫陽花の昨日と違ふ色見つめ

山の道シヤワシヤ歩く蟹踏ぐ

箱根空木数ふる声の響きをり

雲雀

滝落ちて流れて人代わる代わる

滝を聞く子は迷いなく坂登る

長靴は泥の真ん中梅雨晴るる

啄木鳥や真顔で山を削りおり

鰹料理どこかで会ったらしい人

半島の最果ての木に時鳥

鹿たちは皆後ろ向くお花畠

夏の潮古いビデオのドイツ人

エンジンを切つて流るる星の夏

絵にあつた日傘と湖と女

ふじ女

母のため白詰草の首飾り

草笛と口笛ハモる兄と居て

あぢさるに一つの傘の二人かな

路地奥に十葉群るる夕べかな

青時雨徐々に明るき空となり

ジューンブライド青いドレスの妹よ

梅雨の月友と別れしあとの道

ソーダ水透かして見たる君の顔

海霧消えて風車の並ぶ岬かな

滴りに手を浸し聞く鳥の声

松田裕子

若鮎の光の列の廻る

生徒みな過疎の駅掃く清和かな

卯の花や一日二便の路線バス

迫り来る空の暗雲海芋咲く

時の日や少し進みし花時計

蠅虎居間も畳も土間も跳ね

山鳩の鳴いて緑蔭豊かにす

海の日や戦艦陸奥の位置を指し

潮騒にまがふ景擦や青田波

箒手に爪先立ちて実山椒揉る

森口良樹

麦の秋将棋教室賑はへる

六月や突いて遊ぶ団子虫

ビール嬢推しの選手は居るのかな

芋焼酎十八番の歌を先越され

螢袋一本挿して夜の卓

一匙の夫の最期のメロンかな

食べ終へし桜桃の種植ゑてみる

万緑やクロスワードに挑戦す

高梨英子

散り敷ける薔薇の花びら掃き集む

枝蛙ペンキの玩具あるがごと

父の日の仏前にワインチーズも添へ

重たげに石段覆ふ四葩かな

夏草や園児の帽子見え隠れ

夏草に部活の生徒の靴の音

高速道斜面にうねる夏の草

大原良子

富士山をまるごと映す植田かな

古池を取り巻いてゐる半夏生

半夏生ゆるやかに風吹いてをり

山梔子の香つてきたる路地の奥

夜のうちに数多の蛭蚓這ひ出しぬ

短夜や水ひと息に飲み干せり

樋子

青嵐大樹に沿うて下りてゆく

入梅やアンスリウムを求めたり

夏の霧安芸小富士に懸かり来る

沿道のマリーゴールド雨に濡れ

兄の部屋レースカーテン揺れてをり

母譲りの夏帯を着け出掛けたり

美耶

山あひのカフエに鶯声しきり

草を踏む音に驚く雀の子

下ろされて取り込まれたる鯉幟

雨のあと一気に咲いて玄葵

涼風やグリーンシャツ裾揺れて

上島康子

中空を流れ流れて竹落葉

さつき雨同郷の人と語らうて

下野草祖母の小庭に今も咲き

少年のごと首傾げ百合の花

ガンジールの像の近くにカンナ咲く

桑門わかこ

紫陽花の咲かざじまひの山の寺

朝一番南京の花見回りぬ

螢袋群がり咲くを樂しめり

花擬宝珠二本を残し剪り取りぬ

紀英子

岩槻旅人の歌碑を訪ねゆく

大宰府の長堤に蛇衣を脱ぎ

飛梅の青葉にそつと触れにけり

靴紐を結び直せる夏の宿

熊谷ゆり子

梅雨入前半月くつきり昇りたる

梅雨晴の西の山々雲の立つ

梅雨晴間芝刈りの跡まだらなり

いろり端二列三列鮎の串

民

初蝶よどこへ行くのか街の中

鶯に鋏持つ手にも力入る

十薬を煎じて飲みぬ朝と昼

緑蔭のベンチに座り吾子を待つ

土肥 律子

腰高に田を植うる子の腕白し

マンションに貝の風鈴吊るしけり

マンションのベランダに子のプール置く

夕立や子の声高し雨宿り

みさ子

託児所の軒を飛び交ひ夏つばめ

明易し眠れぬままの雨の音

久し振り近所寄り合ひ草むしる

夕立あと土手沿ひの草匂ふかな

やす保

都から送られてくる鉄線花

道端に落ちし青柿子ら拾ふ

六月の鎌倉行の切符かな

高嶋 朔代

令和六年五月度作品集より

知佳子 私の選んだ十句

墳丘墓木の芽をくぐり探し当つ
朝の庭母の代りに木の芽摘む
春雨のやむ間をもののみな光り
低く来て低く去りけり黒揚羽
草原の夏に投げ出す手足かな
吊り橋に人滞る山開き
その影に父母の墓あり大夏木
間伐の谷へ筍流しかな
ピザを焼き緑蔭のなか子が分かつ
しばらくは海にたゆたひ鳥帰る

佐保光俊
村上正人
高尾ひとみ
あざみ
綾乃
栄吉
大畑恵
暁子
すみれ
松田裕子

松田裕子 私の選んだ十句

墳丘墓木の芽をくぐり探し当つ
雨垂れの音や蛙の目借り時
ことごとく夕日を返す春の川
玉葱を剥けば何やら艶めかし
おほどかに犬と濡るるや春の雨
赤信号一片の花吹かれくる
田植終へ田を見つめある人のあり
里人の老いて新樹の風受くる
この町は夏鶯の訪ふ処
永き日の二つ隣の墓仕舞

佐保光俊
村上正人
高尾ひとみ
綾乃
井籐希
辻純江
雲雀
紀英子
高嶋絹代
土肥律子